

一席 沖縄県知事賞

貴婦人の鉢

仲間 友美

春の初めに義理のお母さんになる人から、蘭の鉢をもらった。

彼の実家にご挨拶に行った折に、たくさん育てているから一鉢あげると持たされたのだ。

私はまだ慣れない彼のお母さんに「サボテンも枯らしてしまうような女だから、蘭なんて絶対無理」とは言えず、ありがたく頂戴することにした。持って帰りやすいようにとお母さんが蘭の鉢を包んでくれている間、私は矢継ぎ早に注意事項を訊ねた。

その一、直射日光に当ててはならない。

その二、水を与えすぎてはならない。

その三、蘭が植わっているミズゴケが乾いたらたっぷり水を与えなければならぬ。

たった三点のこの注意事項を私は頭の中で反芻した。

帰りは彼の車まで注意深く鉢の入った紙袋を運び、花に障（さわ）るといけないからとすぐに二人で住むアパートへ帰った。

部屋に帰って一息ついて、はじめて蘭の花をまじまじと観察した。ミズゴケからすっと伸びた花茎に、鮮やかな紫色の花が四つついている。丸みを帯びた可憐な花びらと、存在感のある貴婦人のような佇（たたず）まいが、彼のお母さんによく似ている。

散らかった私達の部屋に不釣り合いな貴婦人が気の毒に思えた。

雑然と置いていた会社用のカバンや書類を片付け、空いたスペースに貴

婦人の鉢を置いた。どうか枯れませぬようにと手を合わせる。

その日から、私のミズゴケチェックが始まった。蘭の前を通ったら、ミズゴケを触って水気を感じるか確認する。もし、ミズゴケが乾いていたら、恐る恐る水を与える。もちろん、水道水ではなくミネラルウォーターを。

花は一カ月程咲き続けた後、根元に近いものから順にしなびていった。慌てた私は、彼のお母さんに彼の携帯からメールを送ってもらった。

「しぼんだ花は取り除いて、花が全部終わったら花茎をちよん切つてあげてね」

お母さんから返ってきた文面通りに、花茎をハサミで切り落とし、ミズゴケも新しいものに交換した。

緑の葉だけになり、ずいぶんござっぱりした貴婦人はようやくアパートの一室に馴染んだように見えた。

しかし、梅雨が終わり、本格的な沖縄の夏が来て、エアコンを使うよう

になると、残った緑の葉がへたりはじめた。水を与えても、ミズゴケを替えても効果はなく、日に日に元気をなくしていく。

彼に再びお母さんにメールしてもらおうと、そろそろベランダに出した方がいいとの指示があった。

メールが届いた夜、さつそくベランダに貴婦人を出してやった。これで一安心と胸をなでおろした。

次の日、仕事から帰ってきてベランダに出た私は大変な間違いを犯したことに気付いた。

アパートのベランダは西向きで、日中の日差しが直接差し込むことはない。

しかし、沖縄の太陽は夕暮れ時に、その猛威をふるっていた。強い西日が蘭の鉢を直撃していたのだ。

もともと弱っていた葉は、茶色く日に焼け生気を失くし、鉢にぶらんと

垂れ、再生が不可能であることを物語っていた。

彼のお母さんが大切に育ててきた花を枯らしてしまった。

どうしよう。とてもじゃないけれど、お母さんには言えない。花屋さんで似ている鉢を探して植え替えようか。そんな子供のようなことで本気で考えた。

うろたえる私に、彼が以前にお母さんからもらったメールの続きを見せてくれた。鉢の世話の仕方が書かれた文章の最後に、こんな一文が書かれていた。

「それでも枯れてしまったのなら、寿命と思つて、綺麗に咲いてくれてありがとうつて言つてあげたらいいよ」

私はただ枯らさないことだけを考へて花を育てていた自分を恥じた。

彼のお母さんは花を一つの命として大切に扱っていたことに気付いた。だからお母さんの家にはたくさんのお蘭が嬉しそうに咲いているのだ。

私も、うちにやってきた貴婦人をたくさん見てあげて、褒めてあげればよかった。咲き誇る命をもっと大切にしていればよかった。

次の日、私は枯れてしまった蘭の葉を片付けた。少し悩んでから、蘭の植わっていた鉢をそのままベランダの隅に置いておくことに決めた。

今はまだからっぽの鉢だけれど、沖繩の強い日差しがやわらいだら、何か初心者向きの植物を植えてみようと思う。

(了)